



## 城

 第四十回 一乗谷城
   
いちじょうだにじょう

～下剋上の先駆け、戦国大名朝倉氏の盛衰～

深草 祐一

現在の福井県福井市の市街地から南東へ10kmほど離れた山あい、国指定史跡の中でも特に重要なものについて指定される特別史跡「一乗谷朝倉氏遺跡」があります。そして、そこで発掘された朝倉氏居館の庭園跡は、国の特別名勝に指定されています。越前一乗谷は、戦乱で荒廃した京を逃れて来た多くの公家や高僧、学者等を受け入れ、「北の京」と呼ばれるほど華やかな文化が花開いた場所であり、戦国時代の文化や街の様子を知る上で非常に重要な遺跡です。朝倉氏といえば、織田信長の妹・市が嫁いだ近江浅井氏と同盟関係にあった大名で、信長を裏切った浅井氏とともに滅ぼされてしまった……という印象くらいしかなくも知れませんが、越前から近江まで万余の大軍を何度も遠征させることができるほどの実力を持った全国屈指の大名でした。今回は、戦国大名朝倉氏の盛衰についてご紹介したいと思います。

## 朝倉孝景「天下悪事始行の張本なり」

朝倉氏は、越前、尾張、遠江の守護を兼ねた有力御家人の斯波氏に仕えた越前在地の国人でした。その祖は南北朝時代に斯波氏の下で戦功をあげ、京に在る斯波氏の目代として越前に下ったと伝わります。室町中期になると、下剋上の先駆けと評される朝倉孝景が斯波氏の内紛に乗じて大きく勢力を伸ばしました。

室町時代の守護、守護代や有力国人らの勢力抗争は、一族が四分五裂して諸派に離合衆参を繰り返すため非常に複雑なのですが、この頃の越前では、幼少の守護の病死により重臣の堀江氏に擁立されて守護に就任した斯波義敏が守護代の甲斐氏と対立を深めていました。そして、斯波義敏は將軍足利義政の命に従わず独断で越前へ兵を進めるも敗れ、守護職を解かれて周防の大内氏の下へ隠退させられます。この戦乱の折、朝倉孝景は甲斐氏の側について斯波義敏擁立派の堀江氏の所領を奪い、また、他家から斯波家の家督を継いで新たに守護に就任した斯波義廉を擁立して

勢力を拡大しました。その後、京で応仁の乱が勃発すると、朝倉孝景は西軍についた斯波義廉の主力として上洛し戦いますが、東軍の細川勝元からの「越前守護職を与える」との誘いを受けて東軍に寝返ります。これは、同盟関係にあった守護代甲斐氏が復権を図る斯波義敏との連携を図ろうとしたためとも言われ、朝倉孝景は越前に戻ると一乗谷を本拠として甲斐氏との戦いに乗り出し、甲斐氏の一族を加賀に追って、ついに越前をほぼ手中に収めることになりました。西軍に周防大内氏の大軍が加わってから押され気味だった東軍にとって、朝倉孝景による越前制圧は大きく、西軍の有利は日本海からの兵糧の補給路を断られたことで大きく傾くこととなりました。その後、西軍の山名宗全、東軍の細川勝元が相次いで死去し、足利義政の子の義尚が元服して將軍宣下を受けると、足利義政の弟の義視との將軍継承争いにも決着が着き、応仁の乱は終息していきます。

こうした争乱の中で守護斯波氏、守護代甲斐氏を越前から追い落とした朝倉孝景は下剋上の先駆けと言われ、重代の莊園を奪われた公家たちからは「天下悪事始行の張本なり」などと散々に酷評されています。一方で、朝倉孝景は戦国家法の先駆けである「朝倉英林壁書」を制定し、世襲にこだわらずに有能な人材を登用すべきことや、名刀よりも廉価な槍を多数集めること、被官の衣服は質素をむねとすることなどを定めており、従来の形式主義や権威主義を廃した合理的な姿勢を示した人物として歴史に名を残しています。一乗谷はこの朝倉孝景により本格的に本拠とされたようであり、越前各地に城郭を築いて散在していた家臣は城下に集められ、その後の朝倉氏繁栄の基礎が築かれたのでした。

## 名将・朝倉宗滴に支えられた全盛期

朝倉孝景の死後、跡を継いだ朝倉氏景は、將軍足利義尚の命により、甲斐氏と和睦しました。これにより、斯波氏の支配していた三国のうち、越前は朝倉氏、遠江は甲斐



一乗谷朝倉氏庭園



朝倉義景館跡

官職としては過去最高位に上り詰めた朝倉義景でしたが、前の將軍足利義輝を暗殺した三好三人衆と松永久秀の手を逃れて来た足利義秋(改めて義昭)を一乗谷に迎えるものの上洛要請に応えようとせず、その後、織田信長のもとへ去った

氏、尾張は織田氏がそれぞれ守護代となることが定められたといえます。領国を実質的に奪われた形の斯波氏は甲斐氏と結んで朝倉氏景と戦いましたが、敗れて越前を逃れ、尾張の織田氏に迎え入れられて、辛うじて尾張守護として織田氏に推戴されることとなったのです。

また、朝倉氏内部に燻っていた火種も消し去られました。朝倉氏景の次の当主朝倉貞景は、謀反を企てた朝倉景豊を敦賀城に攻めて自害させ、代わってその企てを密告してきた叔父の朝倉教景を敦賀郡司に任じています。この朝倉教景ですが、歴代朝倉氏当主と同じく「景」の字が下にあることなどから(上記「景豊」のように嫡子以外は「景」の字を上にかぶる)、元々家督を継ぐべき者とされていた可能性が高く、土壇場で景豊らを裏切ったのではないかという説もあります。しかし、以後朝倉教景(出家して「宗滴」)は一族の重鎮として兄氏景の系統を補佐し、貞景、孝景(上述の孝景と同名)、義景の三代にわたって朝倉氏の政務、軍務を取り仕切っていくこととなります。朝倉宗滴は軍奉行として当主に代わり朝倉軍を率いて出陣し、越前に侵入した30万ともいわれる加賀一向一揆の大軍を九頭竜川の戦いで撃退するなど、朝倉氏の武威を周囲に示しました。そして、幕府の命に従って各地に出兵することで朝倉氏の家格を大いに高めていきます。近江に出陣した折には、対立する浅井亮政と六角定頼との間の調停に務め、以後、朝倉氏と浅井氏の間には親密な同盟関係が結ばれることとなりました。こうして79歳で病に倒れるまで最前線に立ち続けた朝倉宗滴が存命の間は、誰も越前に手を出さず、一乗谷は「北の京」と呼ばれる最盛期を迎えることになったのです。

### 織田信長との抗争

斯波氏を守護とする尾張の守護代織田家では、分家の織田信長が本家の信友を討ち、ついには守護の斯波義銀を追放して、戦国大名となっていきます。織田信長が美濃を攻略し天下布武を唱え始めた頃、朝倉宗滴は既に亡く、重鎮が長命であっただけに後継者が育っていなかった朝倉氏は戦でほとんど戦果を挙げられなくなっていました。そして、

織田信長が將軍の上洛命令に従わないことを理由とした朝倉氏討伐軍を起こした際、亡き朝倉宗滴が親密な関係を築いた浅井氏が信長から離反したことにより、一旦は撃退しましたが、浅井氏との連合軍で臨んだ姉川の戦いには大敗。そして、織田信長と足利義昭が不和となり、信長包圍網の下で武田信玄が遠征軍を起こした際にも、信長を追い詰める好機にも関わらず雪を理由にして越前に撤退してしまいます。結局息を吹き返した信長が大軍をもって一気に呵成に越前に攻め込むと、家臣の信頼を失っていた朝倉義景は大敗を喫し、一乗谷を捨てて逃走した末に家臣に裏切られて自害。ここに戦国大名朝倉氏は滅亡したのです。

### その後の一乗谷

織田の軍勢に焼き尽くされた一乗谷は、そのまま歴史の彼方に埋もれ、約400年後に発掘調査によって再びその姿を現すことになりました。一乗谷の城下町は、一乗谷川に沿った狭い谷あい、堅固な土塁で固められた南北の城戸の間の約1.7kmにわたって築かれており、濠と土塁に囲まれた朝倉氏居館を中心に、整然と区画された町割りがされていたことが分かりました。現在では、朝倉氏居館跡の礎石群や庭園の石組みを見ることができる他、当時の町屋や武家屋敷が約200mにわたる「復元町並」として多数再現されており、戦国時代の都市の様子をリアルに感じることができます。



復元町並

